

# 研究通信

No.171

1993年1月31日刊  
日本村落研究学会  
事務局：神戸大学  
文学部社会学研究室  
北原 淳・藤井 勝  
神戸市灘区六甲台町1-1  
☎078-881-1212  
(内線 4178・4150)

## 四〇周年の節目

坂井 達朗

村研四〇周年の大会が天草で開かれることがわかった。この一〇年程、毎年のように生憎な都合で断念すること多かった。しかしうやつたら行けるのか見当がつかない。そこで博多から水俣へ行き、フェリーで渡るとの御案内に従って、前日の夜には無事迷わずにつくことが出来た。

大会第一日午前中は、国内外の農山漁村に関する個別的な調査を基礎とする自由報告が、午後には共同体論に関する四つの共同研究の中間報告がなされた。中村および有賀についての理論的な考察と、イギリスの村落共同体論に関する歴史的考察二点である。さらに内藤会員による「特別報告・再相続の話」も興味深く拝聴した。第二日の午前中は課題報告「家族経営の危機についての国際比較」が、

日本および韓国の事例についての三点の報告によって行なわれた。午後が共同討議にあてられたことは例年の通りである。

取り上げられたテーマから今年の大会での研究報告を拝聴しての雑駁な印象を述べると、まず第一に挙げられるべきは外国との比較への強い関心がうかがわれたことである。それは国際農村社会学会への強い関心にも現われている。

それに関連して次に指摘できるのは、歴史的関心の強さである。村落社会の今日的な課題を歴史の中に捉えようとする強い問題意識が、自由報告のなかにもまた共同報告にもうかがえたのではないだろうか。

これに統いて挙げられるべき特徴は、家族や同族が取り上げられたことである。村落社会の単位としての家族の変化と、それが全体社会の変動にどの様に対応しうるかが、様々な局面において問題とされ、歴史分析の方法としての同族理論の検討が取り上げられた。

「むら」を「いえ」の連合として捉え、それがかかる現実の問題の解決の糸口を歴史の中にもとめるという発想は、かつての村研の基本的動向の一つであった。その意味では古い問題意識が再び戻ってきたと表現することもできよう。しかしこれを單なる一時の「ほんけがえり」に終わらせないために、こうした問題意識の持続されることが大切であると感じた。

研究の動向についてもさることながら、四〇回大会に参加しての強い印象は、総会の議題として提案された村研の組織変革の問題であった。かつて「サロン的」と評された村研の独特の牧歌的な組織や運営方法が、すでに時代の要請に対応し難くなっていることは否めない事実であろう。執行部の方々の御苦心の原案が示され、熱心

な意見が交換された。未だ結論に到達してはいないが、どんな組織でも四〇年たてば再編を迫られて不思議はない。四〇歳にして惑わすとは聖人のみのよくすることである。会員全員がおおいに考え惑う努力が必要だと痛感した。

(慶應義塾大学)